前世は冷酷皇帝、今世は幼女

2

ZENSE HA
REIKOKU KOUTEI,
KONSE HA YOUJO

まさキチ
Masakichi
illust. 胡宮

登場人物紹介

CHARACTERS

アデリーナ

国内でもトップクラスの
強さを誇るAランク冒険者。

ミシェル

クロードの家の世話をするメイド。
思い込みは激しいが、
家事能力は一流。

ルシフェ

舌足らずな可愛らしい
喋り方の女の子。
その正体はユリウス帝の
前世の宿敵、魔王ルシフェル。

クロード

前世においてユリウスが
絶対の信頼を置いた側近。
圧倒的な戦闘力と
沈着冷静な判断力を持つ。

トリスタン

ユリアナの兄で
シルヴェウス家の次期当主。

フィエルノ

国内最高峰のSランク冒険者。
おどけた態度の色白の少年。

ユーリ

本作の主人公。
前世で大陸を統べた
冷酷皇帝ユリウスが
病弱な貴族令嬢に転生した姿。
身体の元の持ち主、
ユリアナの魂もあわせ持つ。

◆◆　第一章　冷酷皇帝は新たなものを求める　◆◆

人界の最果てに位置する峻険な銀嶺――ドラグニア連峰には、その名の通り多数の竜が王者として君臨している。
常雪が大地を埋め尽くし、絶え間ない吹雪がすべてを覆い隠す。
ただでさえ過酷なこの地を踏みしめる者は少なく、生還を果たした者はさらに限られる。
竜殺しの栄誉を求める無謀な挑戦者か。
竜がため込んだ財宝や、竜の鱗を求める命知らずな盗っ人か。
まさか、ただの腕試しにやってくる者がいるとは、この地に暮らす住人も想像していなかっただろう。
今日は、ドラグニア連峰が年に何度か見せる「機嫌の良い日」だった。
いつもは雲が暗く立ちこめているのだが、その切れ目から日の光が差している。
まるで太陽が、酔狂な闖入者がなにをやらかすか、期待しているかのようだ。
道なき道を、ザクリザクリと深雪を踏みしめる音がリズミカルに響き、時折漏れる息が白く消える。

乾いた冷気は嗅覚を麻痺させ、細い針のようにチクチクとユーリの鼻孔を刺激する。
そのとき、冷たい風が一陣、彼女の髪をふわりと持ち上げた。
彼女は足を止め、舞い上がる粉雪を払う。
氷熊の毛皮でできた外套のフードをめくると、絹糸のような銀髪が陽光に輝き、白磁のごとき相貌が露わになる。
彼女は唯一の連れであるクロードに振り向く。
「ずいぶんと登ったな」
クロードの背越し、連峰の裾から森林が広がっており、人里は遥かその先だ。
細氷越しに煌めく光景が、世界を祝福するかのように、ユーリの澄んだ青翡翠色の瞳に映った。
（うわあ、すごい！　こんなの初めて！）
ユリアナの感嘆が伝わってきて、ユーリは思わず頬を緩めた。
貴族令嬢であったユリアナ・シルヴェウス――彼女の身体に冷酷皇帝ユリウスの意識が宿り、ユーリとしての人生が始まった。
病弱で家にこもりきりだったユリアナにとって、ユーリが見せてくれた外の世界は陽光を反射する白雪のように煌めいていた。
もし今、姿があれば、彼女は身を乗り出し、目を大きく見開いて息を弾ませただろう。

（ふむ……見事な眺めだな。これほどの光景はそうそう見られぬ）
（ユーリお姉ちゃんは、他にもすごい景色を知ってるの？）
（そうだな……）
前世の記憶はほとんどが血塗れな光景で占められている。だが、それでも人間のちっぽけさを感じさせる情景はいくつか心に残っている。それを思い出しながら、ユリアナに言う。
（絶景巡りも悪くない。ともに回ろうではないか）
（うん！）
二人がひとつになったことによって、ユリアナだけではなく、ユーリも新しい世界を知ることができた。
そして、ユリアナの望みを叶えてやることは、ユーリにとっても幸せなことだった。
「もう、そろそろかと」
クロードは二人の会話を認識できない。ユーリの「ずいぶんと登ったな」しか耳に入らなかったので、淡々と返事をするだけだった。
甲冑を脱ぎ、ユーリと同じ外套を身につけている以外、彼は普段と同じ装いだ。
短く刈られた黒髪に茶色い目。長身は鍛え上げられて引き締まり、精悍な顔はあまり感情を表に出さない。
今も、ユーリの付き人たらんと、一歩下がって控えている。

二人が険しい雪山を登り始めてから数時間が経った。
普通の者であれば、一刻も経たぬうちに音を上げてしまう。
よほどの者でも、この標高と寒さでは足取りが重くなり、息も乱れるだろう。
しかし、二人とも息を荒くすることも、疲労を顔に出すこともない。
それからしばらく歩き、この場にそぐわぬ異物に気づいた二人は足を止める。
「雪洞ですね」
二人が視線を向けると、白銀の斜面にぽっかりと口を開けた雪洞がひとつ。あたりに人の気配はない。
内部の壁は人によって固められ、地面には焚き火の跡、天井にはかすかに溶けた痕跡が残されていた。静謐な世界に漂う営みの残り香は、まるで白いキャンバスを汚す黒点のようだった。
「先客がいるようだな」
「今朝、出発したのでしょう」
雪洞から先へと、複数人の足跡が続いている。昨晩の吹雪の後につけられたもので、この雪洞の使用者は今朝、ここを離れたようだ。
「心当たりはあるか？」
「どこの者かは分かりませんが、目的は想像がつきます。ユーリ様の邪魔にはならぬかと」
「ならば良い」

興味を失ったユーリは、雪洞から視線を外した。
二人は歩みを再開する。
「三、四人か」
足跡をたどり、進んでいく。
「目当ては若竜だったな」
ユーリの問いに、クロードは頷く。
二人がここドラグニア連峰にやって来たのは、もちろん、ドラゴンと戦うためだ。
ここ数日、一頭のグライドリーフによって人畜の被害が出ている。
冒険者ギルドが討伐依頼を出したので、二人は依頼を受注した。
当然ながら、冒険者になりたてのFランクのユーリが受けられるわけがない。Aランクのクロードがいたからこそ、依頼を受けられたのである。
ドラゴンは成長段階に応じて行動パターンや強さが変わり、それぞれ名前がついている。
生まれたばかりの幼竜。
グライドリーフはインファント・ドラゴンが成長した二番目の形態だ。
今回の標的は古くなった鱗を脱ぎ捨て、インファント・ドラゴンからグライドリーフへと成長したばかりの個体だ。
グライドリーフは人間でいえば十代、もっとも精力旺盛で育ち盛りな年頃だ。

特に、脱皮直後のグライドリーフは栄養を補給するため、下界にエサを求めて飛び出す。
「それで人畜を襲うようになったと」
「通常であれば、下の森で魔物を狩るだけなのですが」
連峰と人里の間にある広大な森はドラゴンの餌場とすべく、緩衝地帯として人が手をつけずにおいているのだ。
だが、ごく稀に、好奇心旺盛なグライドリーフはそれで満足せずに、人畜を襲うことがある。
「ヤンチャな若造か。嫌いではないな」
ユーリは不敵な笑みを浮かべ、先の戦いを思い出していた。
転生したユーリは実家を離れ、カーティスの街でユリアナとの生活を始めた。
前世の忠臣クロードと再会し、通いメイドのミシェルや魔王が転生した幼女ルシフェ始め新しい出会いがあり、求めていた普通の生活をユーリは楽しんでいた。
だが、順調に進んでいったところに暗雲が広がった。疫病騒ぎから始まる数々の陰謀がカーティスの街を襲ったのだ。
ユーリは陰謀を暴いていき、犯人がユリアナに婚姻を迫ったハウゲン侯爵であると見抜いた。
しかし、話はそこで終わらなかった。ハウゲンの背後には魔族アガレスがいたのだ。
さらにアガレスの裏に、ユリウス帝と魔王ルシフェルを転生させた魔族が存在すると、ユーリは知った。

これからはその魔族との戦いが控えているのだが、今日はお休み、楽しい腕試しの日だ。
魔族アガレスと戦ったことで、ユーリの『魔核』――心臓の裏にある魔力を生み出す器官――は前世ほどとはいかないまでも、強くなった。
その成長具合を確認するため、あれから方々の魔獣を狩ってきた。
そして、数日前、グライドリーフによる被害報告が冒険者ギルドに届いたのだ。
腕試しの集大成としてグライドリーフは最適な相手であり、グライドリーフにとっては運の尽きだった。
「どれほどの相手か。腕が鳴るな」
「グライドリーフの討伐依頼は数年に一度。ちょうどいいタイミングでした」
「そなたは経験があるのか？」
「前世で何度か」
「そなたが出張るほどの脅威か」
「兵卒の実戦訓練の監督です」
「なるほどな。今の余の力でどれだけ戦えるか、楽しみだ」
未知の相手であれば、そして、強敵であるほど、ユーリの血はたぎる。
期待を込めてユーリが空を見上げたとき、上空から激しい風が叩きつけた。
バタバタと外套が揺さぶられ、ユーリは足を踏ん張って耐える。

見上げるとそこには空を切り裂くように滑空する一体のドラゴン。その白い鱗は光を反射してまばゆく輝く。
（うわあ、ワイバーンより大きい！）
ユリアナはユーリを信頼しきっているので、怯えた様子はまったくなかった。
（若いとはいえ、本物のドラゴンであるからな）
頭の中でユリアナに答え、ユーリはクロードに問う。
「あやつがグライドリーフか？　思っていたよりも白いな」
「報告通り、脱皮直後ですね」
二人は後を追い、走り出す。
激しい雪煙を残しながら、全力で走る。平地で走るのと、ほぼ同じスピードだ。
視線の先はグライドリーフをとらえたままで急ぐ。
そのとき、グライドリーフは急降下を始めた。
暴風が叩きつけられる音とともに、地面が激しく揺れる。
「おっと」
フラリとバランスを崩しかけたユーリだったが、グライドリーフの強さの一端を垣間見て不敵に笑った。
遠目にも伝わってくる強者の気配に、血が熱を帯びる。拳が、足が、戦いを求めて動き出しそうになる。この興奮は久しく味わっていなかったものだ。
そして、次の瞬間、絹を裂くような絶叫が聞こえてきた。
「――【身体強化】」
ユーリの指先から魔力がほとばしり、雪よりも輝く白い魔力が彼女の全身を覆い尽くす。
魔力による身体強化は、ひ弱な幼女の身体を、魔族とも戦える戦士へと変化させた。
「後味の悪い思いはしたくない」
先行者の安否が気にかかる。無関係な相手ではあるが、助けられる命を放っておくのも寝覚めが悪い。
（さて、飛ばすぞ！）
（うん！）
身体強化したユーリは全力で駆け出した。
慣れぬ者なら目を回すほどの速さであるが、ユリアナは慣れたものだ。揺れる身体と流れゆく景色を楽しむ余裕があった。
ユーリとクロードは雪煙を巻き上げながら、すり鉢状の窪みの縁――グライドリーフの巣穴にたどり着いた。
冷たい風が二人の頬を切りつけ、すり鉢の底からは血の匂いが混じった生臭い空気が漂ってくる。

地面には白雪が積もり、その上には薄く青いプレート状のものが散らばっている。脱皮したばかりのグライドリーフの鱗だ。
大きなものは数十センチほど、砕けて粉々になったものもあり、陽光に照らされ水面のように煌めいている。
すり鉢の一番深い場所には、四人の冒険者がいた。彼らは深い傷を負い、剣や盾を握る手も震えていた。そして、その顔には戦意ではなく、恐怖の色が濃く浮かび、鮮血が雪を赤く染めていた。
上空のグライドリーフは巨大な翼をゆるやかに上下させ、重力と釣り合わせて浮かんでいる。
そのとき、周囲の空気が震え、下へと叩きつけられ、粉雪が舞い上がった。
「ギリギリ間に合ったようだな」
これはグライドリーフにとって戦闘ではない。遊び半分の一方的な狩りだ。無慈悲な捕食行為だ。
グライドリーフは悠然と空を漂い、獲物を見下ろす。
冒険者たちは動けない。声も出せない。あるのは恐怖だけだ。
聞こえてくるのは、低く唸る風音だけだった。
「グライドリーフの攻撃は高所からの一撃離脱です」
クロードがユーリに説明する。
「いたぶっているようにしか見えんな」
グライドリーフはドラゴンとしては未成熟だ。翼を操り、自由自在に飛ぶことはできない。名

前――グライドの通り、滑空するのだ。
だが、その速度は驚異的で、本気で急降下攻撃すれば、すでに四人まとめて胃の中に収まっていただろう。
しかし、冒険者たちは傷だらけではあるが、誰も死んではいない。
「余が相手だ。かかってこい」
ユーリは挑発するように、グライドリーフに向かって叫ぶ。
グライドリーフもユーリを敵と定めたようで、空中を旋回すると咆哮を発する。
空気の震えが、ビリリとユーリの肌を打った。
「ガキとはいってもドラゴンだな」
以前戦ったワイバーンとは、格が違う。
強敵を前にして、ユーリは怯むどころか、逆に闘志を漲らせた。
「逃げろ」
ユーリの言葉が響いた瞬間、冒険者たちは転げるようにして巣穴の外に出た。
しかし、そのうちの一人が取り残されている。魔法使いの少女だ。意識を失った彼女の腹部からは血が流れ、足元の雪を赤く染めている。命が尽きるのも時間の問題だ。
転移石を握る青年は、一瞬だけ地面に倒れた少女を見つめた。が、恐怖に支配されたその目はすぐにそれ、震える唇で『すまない』と悔いるように声を発した。

「――【転移（サムウェア・ファー・ビヨンド）】」
直後、三人は光の中に消えた。
「仲間を見捨てる、か……」
三人がいた場所を、ユーリは鋭い目つきで睨みつける。
「クロード」
彼はユーリの意図を察し、少女のもとに駆け寄り、抱き上げる。
それから、巣の外に移動すると、少女の傷をポーションで完治させた。
エリクサーと呼ばれる最高級のポーションで、クロードでも数本しか持っていない。
だが、ユーリの命令とあれば、一切躊躇（ためら）うことはなかった。
「さて、楽しませてくれよ」
ユーリは口元に薄い笑みを浮かべる。今度はこちらが狩る側だと言わんばかり。
貫くような視線と鋭い殺気に、生存本能を刺激されたのか、グライドリーフの翼は一瞬、ピタリと動きを止めた。
「どうした？　恐れをなしたか？」
ユーリは変わらぬ笑みをグライドリーフに向ける。
（ユリアナ、なにが起こっても心配するな）
（うん。ユーリお姉ちゃんのこと信じてるから）

ユーリ同様、ユリアナもまったく恐れていなかった。
（怖かったら、目を閉じておれ）
（ううん。皇帝の本気、特等席で見ているよ）
ユリアナの言葉は、ワイバーンと戦ったときに、ユーリが言ったものだ。
そのときのことを思い出して、ユーリはフッと笑う。
見上げると、グライドリーフと目が合った。
獲物がいなくなったことで、赤い目は怒りに染まっている。並の冒険者であれば、射竦（いすく）められて動けなくなるだろう。
ユーリは外套を脱ぎ捨て、臨戦態勢に入った。両足を肩幅に開き、軽く腰を下げ、踵（かかと）を軽く持ち上げる。悪い足場でも素早く動ける姿勢だ。腰の短剣には手を伸ばさず、両腕を胸の前で軽く構えた。
グライドリーフは翼を閉じ、急降下する。
この巨体であれば、彼女の小柄な身体など、擦（かす）るだけで致命傷だ。
彼女は降下のタイミングに合わせ、右足で雪深く踏み込み、左足を蹴り上げる。
「硬いな」
ハイキックがグライドリーフの首筋をとらえたが、弾かれた。鱗にヒビを入れただけだ。
グライドリーフは痛みを感じた様子もなく、急上昇――そして、急降下。

だが、ユーリは突進を軽々と回避してみせる。
躱されたことに苛立ちながらも、グライドリーフは急上昇する。
それから両翼を広げ、強く羽ばたかせる。衝撃波が生じ、ユーリに襲いかかった。
彼女は軽くバックステップで回避するが、その先に落ちていた鱗に足を滑らせる。
「戦いにくいが、まあ、どうということもない」
雪に足を取られようとも、氷の刃が吹き荒れようとも、些細なことだ。
ユリウス帝はもっと過酷な戦場をいくつも越えてきた。火の雨が降る中、無数の敵に囲まれてなお、彼の刃は揺らがなかったのだ。この程度で怯む理由など、どこにもない。
ユーリはすぐに体勢を立て直す。
グライドリーフは両翼を閉じる。再度、急降下し、ユーリに迫った。
だが、動きが読めていれば、躱すのは造作もない。
ユーリが余裕をもって躱すと、グライドリーフは急上昇、それから急降下――
「ワンパターンだな」
どれだけ速くとも、直線的な動きだ。
何度も繰り返される降下攻撃を、ユーリはすべて回避する。
彼女の最初の目的は、強くなった身体性能のチェックだった。
「敏捷性は申し分ない。筋肉の反応も悪くない。想定以上だな。それなら――」

自分の攻撃がまったく当たらないことにグライドリーフは苛立っていた。
「おい、蜥蜴、遅すぎて眠くなるぞ」
ユーリはグライドリーフを挑発する。
ドラゴンは他の魔物と違い、高い知性と傲慢な自尊心を有する。グライドリーフは怒りの咆哮を発したが、彼女はそれすらも愉快そうに受け流した。
再度の急降下。
だが、ユーリは動かない。グライドリーフを見据えたまま、動かない。
巨体が彼女に迫る刹那、ほんのわずか、呼吸ひとつの間で身体をずらした。その動きは正確無比、計算し尽くされた完璧なものだった。
しかし――グライドリーフの鋭い攻撃はユーリの頬をかすめた。
白雪のような肌をつぅと垂れる血を、彼女は親指で拭う。
「なるほど。これが限界か」
今の動きで、彼女は現時点での回避能力上限を把握した。
そして。
「直撃したら即死だな」
自分の身体の頑丈さも分かった。これで実験の第一段階は終了だ。
「次はこっちのターンだな」

防戦一方だったユーリが、反撃に移る。
飛び上がったグライドリーフが降下に移る前に、地面に落ちていた鱗を掴み、投げる。
だが、グライドリーフは翼を羽ばたかせて鱗を回避した。
「調整が必要だな」
グライドリーフは鱗を回避したことでバランスを崩している。
ユーリの目はそれを見逃さない。彼女はもう一枚、鱗を投げる。
しっかりと狙いをつけた鱗はグライドリーフの胴体にぶつかったが、弾かれてしまう。
「うむ。狙いはつけられるな。ならば――【硬化】」
ユーリは落ちている鱗を掴むと、魔力で硬化させる。
「それ」
硬化されて白く輝く鱗は、グライドリーフの翼の付け根を正確に貫いた。
グライドリーフは生まれて初めて感じた痛みに絶叫する。それは大きすぎる隙だった。
「お代わりだ。どんどんいくぞ」
続けざまに投げられた鱗は、グライドリーフの翼をズタズタに切り裂いていく。
やがて、バランスを崩したグライドリーフが地に落ち、飛び散った鮮血が白い地面を染め上げた。
血塗れで呪詛の哭き声をあげるグライドリーフに、ユーリは躊躇いなく駆け寄る。
グライドリーフが反応する前にクルッと前方宙返り、その首元に延髄蹴りを叩き込んだ。

ピシッと音を立て、鱗が割れる。だが、それだけで葬れるほどのダメージではない。
「まだ戦えるか。ワイバーンよりは強いな」
余裕の笑みを浮かべるユーリに向かって、怒り狂ったグライドリーフが突進する。
「遅い」
急降下攻撃より遅い攻撃がユーリに通じるわけもない。
ユーリは軽々と回避した。
「もう、実験は十分だ」
グライドリーフは向きを変えて突っ込んでくる。
ユーリはその背に飛び乗り、腰に差していた短剣を抜く。業物ではない。
そこら辺の数打ち物並みで、とても元皇帝が扱う武器ではない。
だが、これは未来の名匠が打った短剣であり、ユーリが満足しているものだ。白い魔力で短剣を覆えば、たとえ、ドラゴンであろうと――
ユーリは短剣を首の根元にひと突きする。先ほどの延髄蹴りで鱗が割れていた急所に、短剣が突き刺さった。
グライドリーフは絶命した。
「若いドラゴン相手に、この程度か。思った以上に強くなってるな」
ニヤリと笑い、満足げに息を吐いた。

短剣を引き抜いたユーリは、赤く染まった雪原を見渡し、地面に散らばる鱗を数枚拾い集める。
「土産にするか。いろいろと使い道もあろう。ちなみに、売ったらいかほどだ？」
クロードに尋ねる声には、戦いの余韻が乗っていた。
「鱗はサイズによりますが、一枚一〇万から一〇〇万ほどです。その量でしたら、一〇〇〇万ゴルにはなるかと」
平均的な市民にとっては数年分の収入だが、ユーリは頓着しない。
「ならば、この程度で良い」
この戦闘で、多くの鱗が粉々になってしまったが、まだまだ無事なものがあたり一面に散らばっている。
かき集めれば、ひと財産になるが、ユーリには無用の長物だ。普通に暮らせるだけの金があれば十分だ。
「残りは欲深どもにくれてやれ」
彼女は集めた鱗をクロードに渡す。
「クロードよ、後処理はそなたに任せた。余は先に帰る」
「分かりました」
「――【転移】」
ユーリはクロード宅へと転移した。

†

ユーリと別れたクロードは、依頼を受けた冒険者ギルドに転移した。
その腕には意識を失ったままの少女が抱かれている。
着ていたローブこそ破れているものの、傷は完全に癒え、頬にも朱が戻っていた。
連峰に一番近い、寂れた街にある小さな冒険者ギルドだ。
普段ならば、地元の顔見知り冒険者が一〇人いる程度。
だが、今日は狭苦しいギルドが、あふれんばかりの冒険者で賑わっており、古い木造の建物がギシギシと悲鳴を上げていた。
クロードが扉を開くと、肌を刺すような冷たい空気が流れ込む。
一歩足を踏み入れると、彼らの視線がいっせいにクロードに集まる。
そして、入ってきたのがAランク冒険者のクロードであると察すると、彼らは期待に目を輝かせ、口を閉ざした。いかつい男たちが、まるでプレゼントを待ちわびた子どものようだった。
そんな中、三人組の冒険者がクロードに向かって駆けてきた。
「ローラ」
「大丈夫か」

「生きてるの？」
先ほど、ドラゴンに襲われていたところを救われた冒険者たちだ。
「無事だ。傷は完治させておいた」
クロードは三人のうちの一人に少女を渡した。
「ありがとうございます！」
三人は涙ながらに、礼を述べる。
「気にする必要はない」
そう言うとクロードは、真っ直ぐ受け付けカウンターに向かい、淡々とグライドリーフを討伐したことを告げる。
それを聞いたギルドの受付嬢は、ギルド内に響く大声で叫んだ。
「皆様、グライドリーフが討伐されました」
冒険者たちから喝采が上がる。
「死骸は丸々残っています。素材の回収をお願いします！」
受付嬢の言葉が終わるや否や、冒険者たちは我先にと飛び出していった。
彼らはこのときのために、この街に滞在していたのだ。
自分たちでドラゴンを倒すことはできない。だが、代わりとなる仕事があるのだ。
ドラゴンは全身が素材の塊。それを回収する仕事だ。

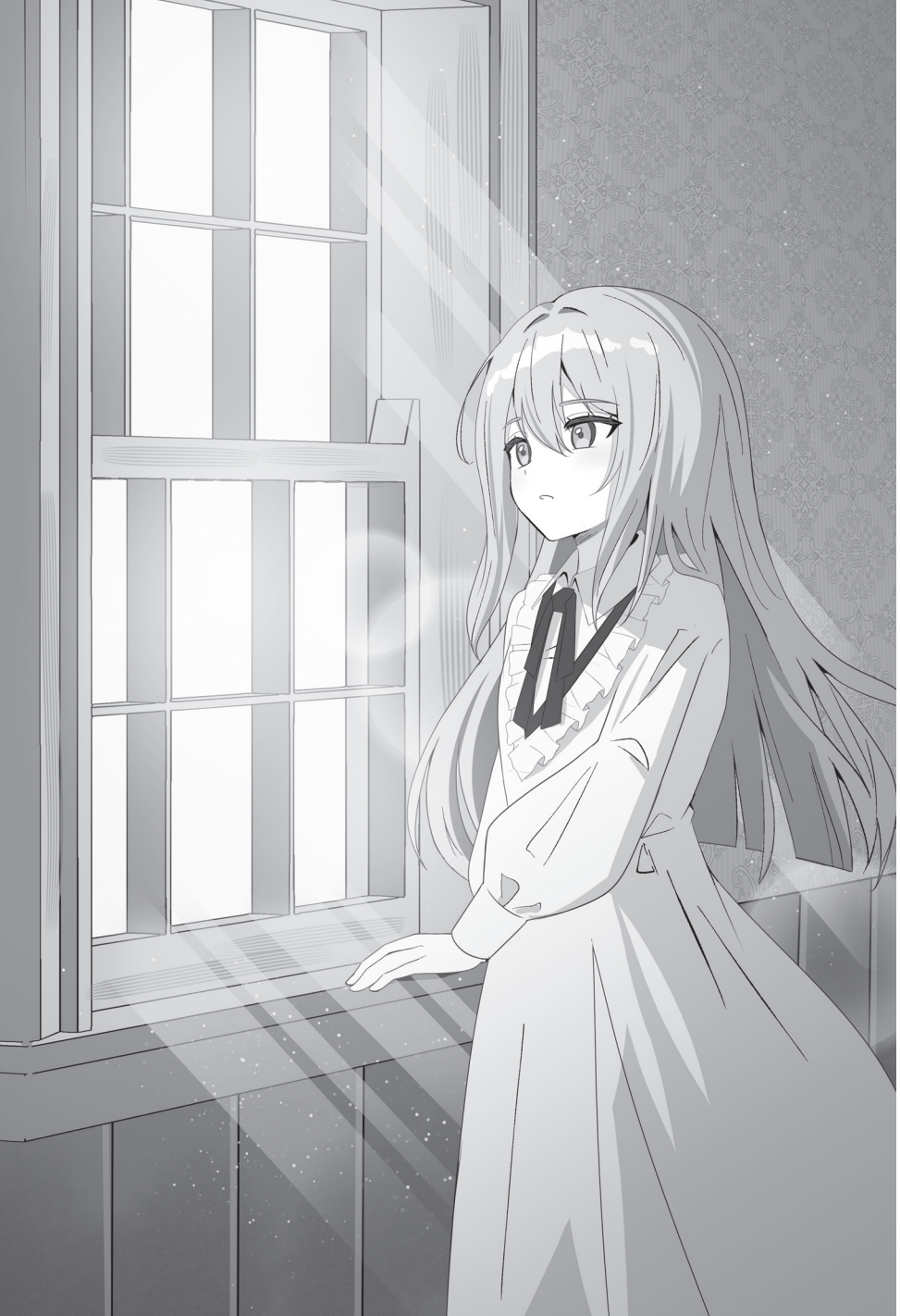
本来ならば、その所有権は討伐者であるクロードにある。素材を回収するにしろ、冒険者は一定の報酬を受け取るだけだ。
しかし、クロードは所有権を放棄した。となると、その素材の買い値は取ってきた者とギルドが折半。困難な雪山から運んでこないといけないが、高額のドラゴン素材であれば大儲けできる。
数年に一度、いや、数十年ぶりかもしれない一大イベントだ。噂はすぐに他の街にも伝わり、この街はさらに大勢の冒険者で賑わうこと間違いなしだ。
閑散としたギルドを後にしようとクロードが入り口に向かったとき、ひとりの少年が入ってきた。
身に纏う暗黒のローブは金糸の刺繍で彩られ、右腕には鈍色の腕輪をつけていた。成人まで二、三年といった白髪の少年で、肌は病的に白かった。少年がフードを外すと赤く光る双眸が現れた。
「あれ、もう終わっちゃった？」
少年は戯けた口調で尋ねる。
その目つきは子どものようだが、瞳の奥底では人を軽蔑し、拒絶しているようにも見えた。
「フィエルノさん」
受付嬢はかしこまった声を少年にかける。
駆け出し冒険者に向ける声ではなかった。
少年の機嫌を損ねぬようにと、細心の注意が払われていた。
なぜなら、フィエルノという名の少年は、ふざけた見かけに反して、Sランク冒険者だからだ。

冒険者の最高峰であるSランクは片手で数えるほどしか存在しない。一介の受付嬢が彼の機嫌を損ねたら、首が飛びかねない。
どうか、彼の逆鱗に触れないようにと、受付嬢は震える声で告げる。
「わざわざご足労いただき、ありがとうございます。申し訳ございませんが――」
深々と頭を下げる受付嬢の言葉を遮り、フィエルノはクロードに視線を向けた。
「あれ、クロード君じゃん。キミが倒しちゃった？」
「ああ」
馴れ馴れしく問いかけられたが、クロードは最低限の返事をする。
相手をする気がないという彼の態度に反応したようで、フィエルノの隣に付き添っていた獣が「グルルゥ」と低く唸った。
獰猛な四本足の獣で、警戒するようにクロードへと鋭い視線を向けている。
巨大な獣だ。二本足で立てば、クロードの背を超えるほど。
全身にわたって灰色の体毛を纏い、背中から頭頂部にかけては逆立つようなオレンジ色の鬣が茂っていた。
鋭い爪は鋼鉄を引き裂き、口元からはみ出る牙は長く太く、容易に鋼鉄をかみちぎるだろう。
フィエルノは獣の背中を撫でながら、口角を上げた。
「へえ、珍しいじゃん。どういう風の吹き回し？」

彼の言う通りだった。
クロードは基本的に指名依頼しか受けない。
Aランクに留まり、Sランクにならないようにするためだ。
Aランクですらしがらみがあるが、Sランクになると、国や貴族からの依頼に雁字搦めになる。
束縛は最低限、なおかつ、自由に行動できる範囲が広い――それがAランクだった。
ユーリの転生を信じていたクロードにとって、Aランクを維持するのは当然のことだった。
それに対し、Sランク冒険者であるフィエルノの主な仕事は、高貴な者たちの揉め事解決だ。恨みを買いかねない仕事であるが、彼の特殊な生い立ちゆえに、今まで大きなトラブルは起こっていない。逆に、後ろ暗いところのある貴族は、彼のことを酷く恐れているほどだ。
ともあれ今回の依頼は真っ当なものだった。フィエルノにとって予想外だったのは、クロードに先を越されたことだ。
「特に理由はない」
クロードは表情を変えず、返事も素っ気ない。
「残念だなあ。せっかく、次の仕事の前にストレス発散したかったのに」
次の仕事――と思わせぶりな言葉だ。
今度は誰の首が飛ぶのか。
だが、クロードはまったく興味がない。ピクリとも反応を示さなかった。

「ヴェノムスにもドラゴンの肉を食べさせてやりたかったのになあ」
そう言って、獣――ヴェノムスの頭を撫でた。
クロードはヴェノムスに視線を向ける。
「それが今の使役獣か？」
「うん、パパにもらったんだ。可愛いでしょ？」
ヴェノムスは腕輪を見せつけて自慢する。鈍色の腕輪には大きな黒い宝石がはめられていた。その腕輪によって魔獣を使役するという噂なのだが、本当かどうかは誰も知らない。
クロードと目が合うと、ヴェノムスはまた、低い唸り声を上げた。
見たことがない獣だった。野生の獣でも、魔獣でもないように思える。
クロードとて、すべての魔獣を知っているわけではないが、獣の放つ気配から強者であると分かる。
これだけの強さでありながら、自分の知らない獣であることに、彼は警戒心を高めた。
それにヴェノムスの『魔核』には違和感があった。クロードがそれを探ろうとすると――頭の中にモヤがかかったようになにも考えられなくなった。
「どうしたの、クロード君？　黙り込んじゃって」
ぼうっとしていたクロードは、フィエルノに声をかけられ、我に返る。
そのときには、ヴェノムスの『魔核』のことはすっかり記憶から抜け落ちていた。

「今度の仕事は面倒くさいんだよね。クロード君、替わってくんない？」
「断る」
「相変わらず、つれないなあ」
「失礼する」
クロードは相手にする気がない。フィエルノの横を通り過ぎようとした。
そのとき、クロードの背中にフィエルノが言葉を投げかける。
「そういえば、なんか、貴族のお嬢さんをお守りしてるんだって？」
クロードは足を止め、振り返る。
それから、フィエルノを射貫くように睨みつけた。
「貴様には関係ない」
冷たく告げると、ツカツカとフィエルノへ歩み寄る。
そして、フィエルノの鼻先まで顔を近づけて、冷たい声を放つ。
「あのお方に近づくな」
「おお、怖い怖い」
凄まれても、フィエルノは戯けてみせる。
「あれ、キミ、前より強くなった？」
「……」



クロードは沈黙で答える。
「まあ、お嬢様を大切にしてやりなよ」
クロードが腕を伸ばし、フィエルノに掴みかかろうとしたところで。
「ガウゥ」
ヴェノムスが威嚇するように唸る。
「あはは、安心しなよ。まだ、キミと戦うときじゃないからね」
嘘くさい笑みを浮かべたフィエルノは、踵を返し、その場を去っていった。

夕刻――
冒険者ギルドでグライドリーフの後処理を終えたクロードは、カーティスの街へと帰還した。
すでに、夕暮れが街を赤く染めている。
自宅の玄関の扉を開けたとき、彼は違和感を覚えた。
明かりは灯されておらず、人の気配はあるが、極めて希薄だった。
その気配を察せられたのは、クロードならではだ。
主の邪魔にならないようにと、彼は静かにリビングへと向かう。
窓辺に佇むユーリを見て、クロードはピタリと動きを止めた。
夕日に赤く照らされた横顔は、初めて見るものだった。

彼は二重の衝撃を受けた。
ユーリの儚げに消え去りそうな美しさに。
そして、ここまでクロードが接近しても、気づく様子がないことに。
彼はこの光景を目に焼き付けようと、黙って待つことにした。
やがて、ようやく、ユーリの意識が浮上する。
ぼんやりと振り向いた彼女に向かって、クロードが告げる。
「遅くなりました」
「首尾はどうだ？」
仲間を置いて逃げ出した冒険者のことだ。
「故意に見捨てたのならば重罪ですが、あの状況だと致し方ないかと」
「お咎めなし……か」
クロードは頷く。
「あの状況を見て、考えたのだ」
珍しくユーリが聞いてほしそうにしている。
ユリウス帝は考えても無駄なことは直感に従った。
だが、考える必要があるものは、徹底的に考えた。誰よりも徹底的に。
今まではそれで結論を出せなかったことはない。最善ではなかったこともあるが、少なくとも、

後悔するような答えはなかった。
「取り残された少女を見捨てた三人。あの場面で余だったらどうするのか……」
見慣れぬユーリの姿に、クロードは真剣に応じなければならないと判断した。
「前世の余だったら答えは簡単。助けられるならば助ける。助けられぬなら捨て置く」
場合によっては、被害を最小限にするために、死ねと命令しなければならないことは少なくなかった。
しかし、それは後悔していない。後悔してしまえば、死んだ者に顔向けできない——そう考えていたからだ。
「だが、今の余は、そう断言できぬと思ってな。助けられるならば、言うまでもない。だが、助けられるかどうか分からないとき……」
自分の気持ちを持て余すのは、初めてかもしれない。我がことながら、ユーリは信じられず、困惑するばかりだった。
ユーリとクロードは、生まれ変わっても主従関係だ。
臣下に報いる——それ以外、人間関係の構築方法をユーリは知らない。
だからこそ、感情を持て余している。
「ユーリ様の求める答えであるかは分かりませんが……」
「申してみよ」

「こういう言葉があります。『冒険者になれる者は、冒険者にしかなれなかった者だけだ』」
同じ生死をかけた職業であっても、冒険者と兵士はまったく異なる。
兵士の生き様はよく知るユーリであったが、冒険者の生き様はほとんど知らない。
「真っ当には生きられぬ。かといって、悪に身をやつすこともできない。難儀なものだな」
「どこにも居場所がない者たちが、繋がりを求めてパーティを組むのでしょう」
世間に背を向けて、孤高に生きられる者はごくわずかだ。そう生きるには気質だけでなく、並外れた強さも要求される。
「ビジネスパートナーというわけではない。かといって、命運をともにするまでの関係でもない……」
ユーリは顎に手を当てて呟く。言語化されても、まだ、理解できなかった。
「分からぬものだ」
自嘲気味にこぼした。
「それを学んでいくのが、ユーリ様の二度目の人生ではないでしょうか？」
「利いたふうな口をきくな」
ユーリはフッと笑う。
「そなたも学ぶ必要があろう。いつまでも、余の臣下ではいられぬぞ」
「分かっております」

本当に分かっているのか、彼の表情からはうかがい知れなかった。
だが、これで一段落と、ユーリは話題を変える。
「グライドリーフの死体はどうなるのだ？」
「今頃、強欲者が殺到してます」
曰く、ドラゴンに捨てるところなし。
鱗だけでなく、ドラゴンの肉や血、内蔵まで、どれも高い価値を持つ。
特に、今回のは翼と延髄に傷があるだけで、胴体は丸々、無傷だ。数千万、数億ゴルになるだろう。
「明日からは、どうなさいますか？　成竜でも狩りますか？」
「いらんいらん。普通の冒険者らしく生きる。余が冒険者にしかなれなかった者かどうか知りたいからな。それに――」
ユーリはニヤリと口元を歪める。
「成竜よりも、そなたの方が強いであろう？」
クロードは自信を持って頷く。
「僭越ながら、お相手させていただきます」
戦闘の勘を取り戻すのに、クロードほどの適任者はいなかった。

†

――『金の家鴨亭』には悩める者に叡智を授ける御子様がいる。
御子がこの活動を始めてからしばらく経ち、その評判はかなり広く知れ渡るところとなった。金の家鴨亭は高級料理店なので、一般人がおいそれと入れる店ではない。
だが、秘されているものこそ、人々の興味を引くのだ。
御子に関しては様々な噂が流れていた。
曰く、孤児院に多額の寄付をしている。
曰く、新しく領主になったアルスを裏で操っている。
曰く、Aランク冒険者であるアデリーナやクロードを使い走りにしている。
曰く、曰く――
中でも今、一番の噂と言えば。
――もう御子様は現れないのではないか。
以前は週に二、三度は訪れていたのだが、疫病騒ぎ以来、御子は一度もこの店を訪れていない。
日を追うごとに、この噂は信憑性を増していった。
そんなある日の晩、ギュウギュウな店内の時計が午後九時を告げた。

騒々しかった店内が、水を打ったように静まり返る。毎日この調子だ。
御子が現れるのは、決まって午後九時。これは演出だった。
バラバラの時間に現れるよりも、毎回決まった時間に現れる。
この方が神秘性が増すという狙いだ。
ゆえに、この時間になると、期待混じりの沈黙が店内を覆い尽くす。
客の顔に諦めが浮かび、口から嘆息が漏れようとした、まさにそのとき。カランとドアベルの乾いた音が静寂に響いた。
待ちわびていた御子の登場に歓声が上がるが、すぐに、いつもと違う様子に人々の驚きがさざ波のように広がった。
御子本人――ユーリはいつもと変わらぬ雰囲気を纏っている。普段と違うのは、その腕に幼子が抱かれていることだ。
人々の戸惑いを気にすることもなく、彼女は店の中央へと進む。
それに合わせて、自然と道ができた。
彼女がテーブルに近づくと、誰かが椅子を引いた。
御子――ユーリは腰を下ろすと、腕の中の幼子に話しかける。
「ルシフェも座るか？」
「うん。いしゅに、しゅわりゅー」

その言葉を聞いて近くにいた者が、椅子をユーリの隣に置く。
「良い子でいるんだぞ」
「わちゃったー」
すぐに給仕の少女が、頼まれないうちにミルクたっぷりのグラスを持ってきた。
いわゆる「いつもの」というやつだ。
「ルシフェもミルクで良いか？」
「るぅも、みゅくー。あちゃかいの」
「ホットミルクだ」
「承知いたしました」
それきりユーリは黙り込んだ。
「ホットミルクです」
給仕の少女はルシフェの前にもカップを差し出すと、ペコリとお辞儀をして背景に消えていった。
「熱いから気をつけるんだぞ」
「わかっちゃー」
ルシフェはちっちゃな両手でカップを掴み、ふぅふぅと息をかける。
その姿に、人々の口元が緩んだ。
それから、ルシフェはカップに口をつけた。

「あちち」
「だから、言ったではないか」
「ごめなちゃい」
「ほら、火傷してないか？」
「あい」
ルシフェを気遣うユーリを見て、「一体、この幼女は何者だ？」と皆の頭に疑問が浮かぶが、それを尋ねられる雰囲気ではなかった。
ユーリよりも年下で舌っ足らずなしゃべり方。艶やかな紫色の髪を伸ばし、垂れた目に丸っこくあどけない顔つき。
この幼女の身体に魔王が宿っているとは、誰も想像していないであろう。
今日は昼寝しすぎで寝つけなそうだったから、ユーリはルシフェを連れてきたのだ。
この時間はユリアナも眠っている。ユーリが夜の街を楽しむ時間だった。
いつもは見られない、御子様の人間らしさに皆は戸惑う。
しかし、ユーリはまったく気にした様子がない。
悠然とミルクをひと口飲んでから、口を開いた。
「今日は誰からだ？」
ユーリにとっても、久しぶりの御子が始まった。

先日、冒険者の少女を救ったとき、ユーリは疑問を持った。
前世において、人間関係は「臣下か、敵か」、それだけしか知らなかったし、それで十分だった。
だが、今世を自由に生きるためには、それ以外の人間関係を学ぶ必要がある。
そのために御子を演じるのが適していると判断したのが、御子再開の理由であった。
ユーリの問いかけに、二人の男がテーブルにつく。大柄なヒゲの男と、小柄なメガネの男だ。風体は似ても似つかぬが、顔の作りにどこか似たところがある。
「ほう、二人とは珍しいな」とユーリが思っていると、メガネの男が口を開いた。
「御子様、お知恵をお貸しください」
彼は丁寧な口調で頭を下げる。
「おい、ホントにこんなガキに訊くのか？」
それに対し、ヒゲ男は横柄な態度だ。
「兄さん、失礼だぞ」
ヒゲはメガネにたしなめられても、ただ「ふん」と鼻を鳴らすだけだった。
ユーリは二人の態度を気にすることもなく、鷹揚に告げる。
「話してみよ」
「実は、相続のことなんです」
問いかけにメガネが答えた。ユーリは頷いて続きをうながす。

「先日、親父が死んで、土地を相続することになったのですが……」
メガネは二〇代半ばで、裕福な身なりをしているが、その顔はやつれていた。ヒゲはその数歳上で、傲慢さが顔に滲み出ている。
「自分と兄さんで分割したいんですが、揉めてるんです」
「お前が欲張るからだ」
ヒゲは腕を組んで、ムスッと苛立ちを隠しもしない。
「ほう。単に二等分すれば良い、というわけにはいかないのだな」
ユーリはメガネから視線をそらさずに言う。
「御子様のおっしゃる通りです。その土地は――」
メガネの話によると、相続者は彼と兄の二人だけで、父が所有していた土地をどう分割するかで揉めているとのこと。もし土地が均一な長方形であれば、特に揉めることもなかっただろう。
しかし、その土地は歪な形をしており、日当たりなどの条件も異なるので、単純に面積で二等分ではお互い納得がいかない。
困り果てて、御子の叡智を頼りに来たのだった。
聴衆がユーリの言葉を待っていたが、出てきたのは予想外の言葉だった。
「ルシフェ、そなたならどうする？」
当然ながら、ルシフェは話の内容は理解していない。

だから、ユーリは彼女が持つカップを指差した。
「みゅくー？」
「そうだ、ミルクだ」
「おいちー」
周りはこのやり取りに笑みをこぼすが、当事者にとっては堪らない。
メガネは困ったように肩をすくめるだけだったが、ヒゲは怒りを露わにする。
「ふざけてるんじゃねえよ」
ドンとテーブルを殴りつけた。
「おい」
見かねた数人がヒゲに掴みかかり、連れ出そうとした。
そこに、ユーリはひと言、発する。
「静まれ」
それだけで十分だった。物音が消える。
ユーリはヒゲの目を見る。睨みつけているわけではないが、ヒゲの背筋を冷たい汗が流れた。
「すまねえ」
ヒゲはかしこまり、粗暴さを引っ込めた。
ユーリはグラスのミルクを一気に飲み干す。

それからルシフェとの会話を再開した。
「ちょうどミルクも冷めたところだ。ルシフェ、そのミルクを余と半分こしてくれるか？」
「ねえちゃ、のどかわいちゃ？」
「ああ、だから、ルシフェのミルクを分けてほしい」
「わかっちゃー」
素直なルシフェの頭を、ユーリが優しく撫でる。
「だが、困った。余のグラスとルシフェのカップは形が違う」
分かっているのかどうか、ルシフェは「うんうん」と頷いた。
「それでも、半分こできるか？」
「やりゅー」
彼女は自分のカップを持ち上げるが、手がプルプルと震えている。
「どれ、手伝ってやろう」
ユーリが彼女の手を支え、カップを傾ける。
「ちょうど良いところで『ストップ』しろ」
「わかちゃー」
カップからグラスに少しずつミルクが注がれていく。
「すとっぴゅ」

ルシフェの合図にユーリが、カップを戻す。
「どうだ、これで半分こできたか？」
「むー」
彼女はカップとグラスを見比べて、首をかしげる。
「こっち、おい」
彼女はしばらく考えてから、グラスを指差した。
「グラスの方が多いのか」
「うん」
「じゃあ、今度は余が注いでやろう」
ユーリはさっきよりもゆっくりと、ミルクを注いでいく。
「すとっぴゅ」
そう言うと、ルシフェは満足そうな笑みを見せる。
「これで良いのだな？」
「はんびゅこ、できちゃー」
「じゃあ、余はグラスをもらおう。ルシフェはカップで良いか？」
「いいよー」
「というわけだ」

ユーリはグラスのミルクを飲み干してから、聴衆を見回して告げた。
店内はしーんと静まり返った。
「どうした？」
呆気にとられる者、考え込む者、小声で相談する者。
そんな中、一人の女性が声を上げた。
「ああ、そういうことね！」
聴衆の輪の外側から聞こえた声の主に、ユーリが視線を向ける。
自然と人が分かれ、女性の顔が見えるようになった。
緑色の髪は肩のあたりで軽くカールしており、頭頂部には細い編み込みが施されている。
鮮やかなエメラルドグリーンの瞳には人懐っこさが浮かび、白いブラウスに落ち着いた色のワンピースは商人らしい、この店に相応しい格調を備えていた。
ユーリと女の目が合う。彼女はユーリに視線を向けられても怯むことなく、自信を湛えた笑みを浮かべた。
「申してみよ」
興味を引かれたユーリは、口角を上げる。
「一人が半分に分けて、もう一人がどっちかを選ぶ――そういうことでしょ？」
「その通りだ。『切って、選ばせろ』。昔からそう言われている」

ユーリが顎で続きをうながす。
「まず、アンタが土地をふたつに分けるんだよ。自分にとってちょうど半分こ、どっちをもらっても満足できるようにね」
女はメガネに向かって言う。
「それで、そのふたつのうちどっちが欲しいか、ヒゲに選ばせるんだよ」
群衆の一部は理解したようで、囁き声がちらほら聞こえる。
「分けた方はどっちにしろ、半分の土地をもらえる。選んだ方も半分以上はもらえる。どちらからも文句は出ない」
女のかみ砕いた説明に、賞賛の声が上がる。
「御子様、素晴らしい叡智を授けていただき、ありがとうございます」
メガネはユーリに向かって頭を下げた。
「兄さんも、納得いっただろ？」
「なんか、騙されたような気がするぜ」
「なら、こうしよう。分けるのは兄さんだ。それで、俺がどっちか選ぶよ」
それでも承服しかねるのか、ヒゲは腕組みをして考え込んでいる。
「ほう」
それに対して、ユーリの口角が少し緩んだ。

チラと見ると、先ほど答えた女もユーリと同じ結論にたどり着いたようで、微笑んでいる。
「どんな分け方でも、兄さんの好きに分けて良いから。絶対に文句は言わないから。そこは兄さんに譲るから、納得してくれないか？」
メガネが殊勝に下手に出たのを見て、ヒゲがニヤけ顔を見せる。
「そうかそうか。お前も少しは物の道理が分かるんだな。よし、それで良いだろう」
メガネが差し出した右手を、ヒゲが強く握る。
「お嬢ちゃん、ありがとよ」
ヒゲが礼を言おうとユーリの方を見たとき、メガネはこっそりと口元を歪めた。
それに気がついたのは、ユーリと先ほどの女だけだった。
さて、どうするか――ユーリはなにか言いたげでウズウズしている女に顎で合図を送った。
「ねえ、ヒゲの兄さん、アンタ騙されてるよ」
「なっ!?」
どういうことだ、とヒゲがメガネを睨みつけた。
「なっ、言いがかりだよ」
メガネは言い訳するが、その目は泳いでいた。
ユーリは面白くなってきたと、心底嬉しそうだ。
聴衆も、今日はいつもと趣向が違うことに興味津々だ。

「おちゃわりー」
そこにルシフェの場違いな声が上がった。その声に苛立った様子で、ヒゲが女に言う。
「おい、そこの女、説明しろよ」
「どっちが分けても、二人とも半分以上はもらえる。その意味では、公平だよ」
「なら、なにが問題だ」
「分けた方は絶対に半分。それより多くはもらえない」
女の気づきに、ユーリはそっと笑みを浮かべた。
「だけど、選ぶ方は半分より多くもらえる。元の分け方がたまたま自分の価値観と一緒じゃない限りはね」
今回の土地分割のように、その価値が主観によって決まる問題において、公平性の基準はいくつかある。代表的なのは「お互いが半分以上を手にしている」ことと、「お互いが相手の取り分を羨ましいと思わない」という、ふたつの基準だ。この意味では、ユーリが提案したのは両方の基準を満たす公平な分割方法だが、それでも実際は選ぶ方が有利なのだ。
この場にいる者は、皆それなりの教育を受けているし、商売に携わっている者も多い。ある程度はピンと来たようだ。
「おい、テメェ！」
ヒゲ男もようやく思い至ったようで、弟に掴みかかった。

「静まれ」
ピタリと場が静まる。
「どちらも納得しておらぬようだな。ならば、余が最良の方法を教えてやろう」
ユーリは表情を消し、短剣をテーブルに載せた。
以前、この場で鍛冶手伝いの少年から買い取った短剣だ。
ザワついていた空気が、ユーリが放つ冷酷さに凍りついたように静まった。
「この程度で醜く争うならば、どうやっても遺恨は残る。どうせ、後になってから揉めるくらいなら、この場でケリをつけた方が安心できるのではないか？」
兄弟は動きを止めた。揉めていたとはいえ、そこまでは思っていなかったのだろう。
「心配する必要はない。後処理なら余が引き受けよう」
ユーリは冷酷に告げ、無慈悲に笑った。
「ここで起きたことは誰も見なかった。それで良いな？」
ユーリは聴衆を見回す。口を挟める者は誰もいなかった。
ここで相手を殺めれば、すべてを手に入れられる。
そう言われて実行に移せる者はこの場にいないだろう。
いや、この場に限らず、普通の者ならできない。
なぜなら、行動の選択肢に「殺す」を含んでいないからだ。

だから、ユーリがそれを俎上に載せただけで、固まってしまう。
静寂の中、ユーリは前世を回想していた。
王座を巡って、二人の兄と殺し合ったことを。
大きな利が絡めば、たとえ血の繋がった兄弟であっても、血で血を洗う。
「人間は、自分の力ではなく手に入れたものほど執着する」
ユーリは誰に言うともなく呟いた。
「ねえちゃ、ころちゅの？」
無垢な顔でルシフェがユーリを見る。
「どうやら、その度胸も、覚悟もないようだ」
ユーリはルシフェの頭を優しく撫でながら答えた。
「ころちゅの、よきゅない。なかよくしゅりゅー」
「だそうだ。もう良いであろう」
ユーリに冷たい視線を向けられ、兄弟はすごすごとこの場を後にするしかなかった。
彼女によって「殺す」という選択肢が二人に植えつけられた。この後、二人の人生はどうなるであろうか。
「女、名前は？」
先ほどの女にユーリが尋ねる。その視線はずいぶんと柔らかくなっていた。

立ち読みサンプル
はここまで

「御子様に名乗るほどの者ではないけど」
「構わぬ」
「マルゴット。しがない商人だよ」
お互いを見定めるように、二人の視線が交差する。
「そなたも悩みがあるか？」
「ううん。噂の御子様をひと目、見たくてね」
「そうか」
「それに、自分の悩みは、自分で解決したいんでね」
「ならば、そなたが悩みを持ってくる日を楽しみにしておこう」
「ははっ。その際は、よろしくお願いするよ」
そう言い残すと、マルゴットは手を振って、去っていった。

†

数日後――
朝の冒険者ギルドは、ムッとした熱気に満ちている。いつも通りだ。
ユーリが入ってきても、誰も驚かない。これもまた、いつも通りだ。